

# エトルリア語文法の解明に向けて

河崎 靖

## 1.

未知の言語について新しい事実を知ることは興味深いことである。言語は、民族の感情、民話など文化史料を記録し、また記録に残されたものを読み解く道具だからである。本稿は、ヨーロッパ古代の謎の言語、エトルリア語の言語文化全般にわたり、過去のアーカイブを構築する意味も込めて、その全体像に迫るものである。これまでの研究成果を踏まえ、先のルーン文字に影響を与えたかもしれないエトルリアのアルファベットについても論及したい。また、最後に語彙集を付け実用性を図り、かつ全般的に、エトルリア語に限らずマイナーな言語を対象とする言語研究の輪郭を浮かび上がらせるべく各所になるべく多く注記を添えるようにした。

さて、一般に古代言語・古代文字の解読と包括的に言われているもののうちでも、実際には対象の性格にしたがって、いくつかのタイプがある。対象とする言語・文字の状況から、文字の解読は次の4つのパターンに分類される。

- A型：既知の文字で既知の言語が記述されている場合。
- B型：未知の文字で既知の言語が記述されている場合。
- C型：既知の文字で未知の言語が記述されている場合。
- D型：未知の文字で未知の言語が記述されている場合。

このうち、C型・D型は言語の復元が主な研究課題になり、B型・D型に関しては文字の解読が主たるテーマである<sup>1</sup>。いずれの場合も、このような限られ

たデータを用いて文法を記述することは実際、困難な作業で、この理想に向かって少しずつ作業を進めるわけである。こうしたプロセスは、たいていの場合、文法・テキスト・辞書を作ることから始まり、これら3つの仕事は互いに絡み合っている。いわば、これら3つは同時に行われていくべきものである。

併せて、危機に瀕したマイナーな言語を区分する際、現状に応じて危機の型(タイプ)をたてることができる<sup>2</sup>。

<絶滅> (部族の絶滅) ある言語の話者集団が完全に途絶える場合。

例：チャタム語 (ニュージーランドの南島の東)

<代替>・<併合> 政治的な要因により言語が置き換わる場合。

例：ウアトプタブ語

<後退>・<衰弱> 例：ハワイ語

<変質> 例：ツアモツ語

言語の絶滅はさまざまな形で生じるが、いずれにしても、次世代に自らの言語を引き継ぐことができないことから起こるわけである。その要因は、何らかの大きな圧力が当該の言語共同体の社会的伝統を阻害することである<sup>3</sup>。

確かにエトルリア人はルネサンス時代から20世紀末までずっと謎の民族という語られ方をしてきた。しかしながら、今日エトルリア学は近代的な学問の枠組みで捉えられるようになり、最新の研究成果に基づきエトルリアの言語文化を学術的に考察するというのが本稿の狙いである。

## 2.

エトルリア人は古代の「神秘に包まれた民族」の1つである。イタリアの、ローマ人たちよりもさらに昔のあのおぼろげな影に包まれた有史以前の時代に属する、今は消え失せた文明の1つである<sup>4</sup>。

イタリア北中部を旅すればエトルリアの遺跡に出くわすことがよくある。高度な文明を誇っていたエトルリアである。ただ、今日までエトルリア語<sup>5</sup>は解読が不可能とされている。名前や墓碑銘などしか存在せず<sup>6</sup>、長いテキストが在証されていないので、その言語（エトルリア語）を読み解く手がかりが少ないためである<sup>7</sup>。それでも、世界最古の（製本された）本はエトルリア語のもの（2500年前）と言われ、ソフィア世界史博物館（ブルガリア）に所蔵され、6枚のページと24金（純金）でできている。中には、馬に乗る戦士、人魚などが描かれている。

エトルリアは、当時のイタリア半島で文化・経済面において、何と言っても先進的であり、ギリシアからいち早く文字を採り入れたことで名高い。紀元前8世紀以降、クーマエ（南イタリア）を拠点に活発な植民活動を行っていたギリシア人と積極的に交流し、ギリシア人がエトルリア人の住むイタリアの地に初めて文字をもたらしたのである。現存する文字資料の年代は、最古のエトルリア文字が確立した紀元前7世紀から紀元前1世紀頃にまで及ぶ。しかしながら、それ以降はローマ帝国の隆盛に伴いエトルリア語は消滅の道を辿るのみであった<sup>8</sup>。

エトルリア語はイタリア半島の現在トスカーナ地方と呼ばれる地域で、紀元前8世紀から紀元前1世紀頃に、エトルリア人によって話され、かつ書かれていた言語である。紀元前のイタリア半島と言うとラテン語がよく知られているが、エトルリア語はそのラテン語よりも少し前にイタリア半島で栄えた文明の言葉であるが、現存する言語データは限られており、その大半は墓碑銘がほとんどであり、エトルリア語の語彙もごくわずかしかなることができないのである。

エトルリア語が最後にいつ話されたのかは実は正確にわかっている。西暦408年、ゴート人の王アラルリックによって破壊される危機に直面したローマにおいて：「何人かのエトルリアの僧侶が皇帝のもとに赴き、敵を撃退するため

の秘儀をおこない、エトルリア語の祈りと呪文を唱えることを申し出た。しかし彼らは目的を達しなかった。というのも、ローマは占拠されてしまったからである。そして、これがエトルリア語が話された最後の機会だったのである」<sup>9</sup>。この神秘に満ちた古代の言語、エトルリア語の全体像の解明に向けて、以下、筆を進めたい。



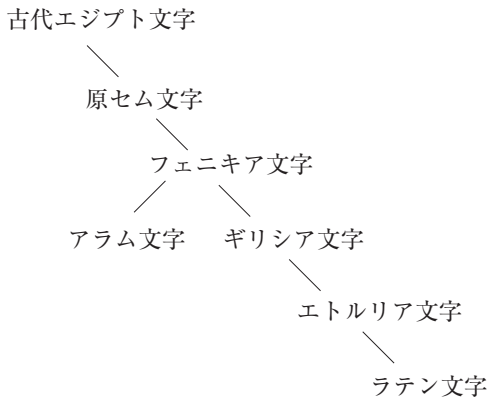
テラコッタ製<sup>10</sup>「夫婦の棺」(BC520年頃。チェルヴェーテリ出土)長さ1,91m、高さ1,41m (ローマのヴィラ・ジュリア・エトルリア博物館所蔵)

### 3.

「ローマ人は地誌には関心を抱いたが、エトルリア語やリグーリア語のような言語については何一つ記録を残さなかった。これらの言語はローマから2、3日歩いた場所で何世紀にもわたって話されていたのだが」 Evans (2013:49)

エトルリア人は、紀元前8世紀頃から紀元前1世紀頃にかけて北イタリアを中心に西地中海において初の都市文化を築いた民族である。歴史の過程でローマ化しエトルリア独自の言語や文化を失ってしまいはしたが、今日のアルファ

ベットなど、ギリシアからエトルリア経由でローマに伝えられた文化遺産があり、その歴史的意義は決して小さくない。エトルリア自身が元々もっていた文化の上にギリシアから多大の影響を受けローマに橋渡ししたのである。アルファベットの歴史の背景には、エジプトのヒエログリフからの文字の誕生のバックグラウンドがある。文字の史的発達の模様を系統立って押さえたものが次の表である。



エトルリア語の何よりの魅力は、この言語が今のところ、既知のどの言語とも親縁性がないとされている点である。文字の系統がこれほど明確にわかっているのとは好対照である。例えば近隣の印欧語系の古典語と比べてみても、エトルリア語の基礎語彙は類縁性を全く示さない。印欧語全体を見渡してみても、そこにはエトルリア語との共通性は見出されない。

	ギリシャ語	ラテン語	エトルリア語
父	patēr	pater	apa
母	māter	māter	ati
息子	hyios	filius	clan

娘 thygatēr filia sech

未知の言語に対する好奇心は人の心に絶えずあり、今日でもエトルリア語の謎に挑む人々が後を絶たない<sup>11</sup>。今なおエトルリア文法の正体は厳密にはわかっておらず、それゆえ「エトルリアの謎」と呼ばれている。このように、エトルリア語は、印欧語の世界が確立される以前に地中海沿岸で使われていた諸言語の基層に属するものではないかと推測されるようになった<sup>12</sup>。実際、エトルリア語で書かれたテキストは未だに十分には解読されるに至っていない<sup>13</sup>。エトルリア人の墓から出土する膨大な数（数千）の考古史料に比して文字資料が少なく、これがギリシア・ローマ言語文化とは大きく異なるエトルリア語の特徴とも言える。エトルリア人自身が書いた文献テキストが皆無ということもあり、これもあって今なお私たちに「謎のエトルリア文化」というイメージを与えるのであろう<sup>14</sup>。

### エトルリア史 略年表

エトルリア関係	エトルリア以外	
	前 3000 年	エーゲ海文明、始まる。
前 9 世紀		中南部イタリアで文化活動が始まる。ヴィッラノーヴァ文化が栄える。
前 800 年頃		エトルリアで文字の使用が始まる。
	前 8 世紀	フェニキアの植民地化（サルデーニャ島・シチリア島西部）。ギリシアの植民地化（南イタリア）。
	前 753 年	ローマ建国（伝承）。
前 720 年頃		ギリシアで黒絵式技法の焼き物が開発→エトルリアの陶器に影響。
	前 650 年頃～	ブッケロ陶器の最盛期。
前 7 世紀		都市国家が誕生。

エトルリア語文法の解明に向けて

前 620 年頃～		エトルリアでギリシアの影響を受けた焼き物が作られ始める。
前 616 年～		
前 509 年		エトルリア出身の王、ローマを統治。
前 600 年頃		エトルリア人の支配権拡大 (ローマを含む) <sup>15</sup> 。
前 6 世紀		エトルリア・カルタゴの同盟の結成→西地中海の海上支配。エトルリアの植民地化 (カンパーニアおよびピアヌラ・パダナ<ポー川流域の平野>)。
前 530 年頃		ギリシアで赤絵式技法の焼き物が開発→エトルリアの陶器に影響。
	前 509 年	エトルリアの支配圏から外れ、ローマで共和政が成立 (伝承) <sup>16</sup> 。
前 6 世紀末		キウジの王ボルセンナ、ローマと戦う。
前 5 世紀		エトルリア、ラツィオ地方 (ローマ周辺) の統治権を失う。
前 474 年		エトルリア、クーマエ沖 (ナポリ湾) の海戦 (エトルリア人×シラクサ人) で敗れ、エトルリアは海上支配権を失う→以降エトルリアは衰退に向かう。エトルリアの孤立化。
	前 448-433 年	パルテノン神殿が建設される (ギリシア)。
	前 426 年	ローマ、フィデネを征服。
	前 4 世紀	ガリア人の侵入。
	前 396 年	ローマ人、ヴェイオを破壊。
	前 390 年	ガリア人、ローマを包囲。
前 358 年		ローマと開戦。
前 353 年		チェルヴェテリがローマに降伏 (カエレにて)。
前 351 年		タルキニアがローマに降伏 (タルクィニアにて)。

エトルリア語文法の解明に向けて

前 310 年		ローマ人、エトルリアへ侵入。
	前 295 年	ローマがセンティヌムの戦いでエトルリア人・ガリア人・サムニウム人・ウンブリア人の連合軍を破る。
前 293 年		ローマ人、カエレを破壊。
	前 272 年	ローマがイタリア半島を統一。エトルリア人もその支配下に入る。
前 265 年		ウォルシニイ、征服・破壊される。
	前 264-241 年	第 1 次ポエニ戦争。
	前 255 年	ローマ人、ガリア人に勝利。
前 225 年		ローマ・エトルリア連合軍がガリア軍を破る（タラモーネの戦い）。
	前 218-202 年	第 2 次ポエニ戦争（ローマ、カルタゴのハンニバルと戦う）。
前 150 年頃		エトルリアが急速にローマに同化していく。
	前 149-146 年	第 1 次ポエニ戦争→カルタゴの崩壊。
	前 100 年	ミロのヴィーナスが制作される（ギリシア）。
前 1 世紀		エトルリア人、ローマ市民権を得る。
	前 42 年	オクタヴィアヌス帝、ペルーシアに火を放つ。
	前 27 年	エトルリア、ローマの第 7 区となる（アウグストゥス帝が 11 に分割した領土のうちの第 7 区が、その地域に住む民族の呼称エトルスキに因んでエトルリアと名付けられた）。
	後 117 年	ローマ帝国の領土が最大になる。

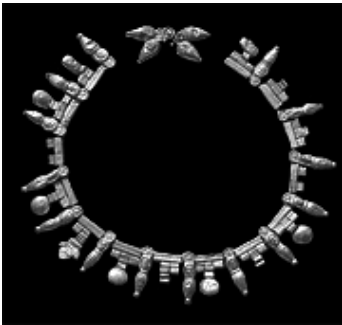




タルクィニアの「豹の墓」に描かれた宴会の光景（紀元前 470 年頃）<sup>17</sup>

#### 4.

ローマ人は地誌には関心を抱いたが、エトルリア語やリグーリア語のような言語については何一つ記録を残さなかった。これらの言語はローマから 2、3 日歩いた場所でも何世紀にもわたって話されていたのだが<sup>18</sup>。



エトルリアのネックレス<sup>19</sup>

ローマの歴史家ティトゥス・リウィウスによると、アルプスからメッシナ海峡に至るイタリアのほぼ全域にエトルリア国家の華々しい名声が鳴り響いていたとのこと、ポローニャを中心とするポー河流域に、紀元前7世紀から5世紀にかけてエトルリア文明が花開いていたのは確かである<sup>20</sup>。エトルリア人は、ローマ人がイタリア半島を征服する以前のイタリア中部で最も栄えていた民族であり<sup>21</sup>、異民族としてギリシア文化を最もよく理解していた人々なのである。ただ、強大な統一国家を形成していたわけではなく、また軍事に抜きん出たわけでもなかった。

豊かな鉱物資源に恵まれ、地味豊かな耕作地という風土のトスカーナ地方にあって<sup>22</sup>、エトルリア人は、金属（特に銅と鉄）の採鉱を行い、地中海方面に輸出して富を得ていた<sup>23</sup>。遠く北欧スウェーデンでもエトルリアのブロンズが発見されており、鉱物と農産物を載せたエトルリアの船が地中海全域を航行し（おそらくポルトガル領マディラ諸島あたりの）大西洋域まで達していたと考えられている。こうしてイタリア半島と地中海におけるエトルリアの影響力が増大していくにつれて、エトルリア人は地中海を舞台に交易を展開していたフェニキア人・ギリシア人との間に摩擦を生むこととなる。



エトルリア人の領域（紀元前750年〈濃い色〉）。紀元前750年から500年にかけて拡張〈薄い色〉。エトルリア語は、トスカーナ州（「エトルリア人の土地」の意）・ティレニア海（「エトルリア人の海」の意）に残っている<sup>24</sup>。

エトルリア人の起源は今日なお、未解決のままである<sup>25</sup>。エトルリアの起源に関して古くから伝統的に唱えられてきた説は次の3つである。まず挙げられるのは歴史家ヘロドトスに基づくものである。ヘロドトスの『歴史』によれば「自分たちの祖先が小アジアからテュレノスなる者に率いられ移住しエトルリアの都市を築いた」というリュディア人のことばを引用し<sup>26</sup>、エトルリア人が小アジア起源であることが示されている<sup>27</sup>。確かに、この説は、古代には広く受け入れられていた。前1世紀にウェルギリウスがリュディア人と書けば<sup>28</sup>、それはエトルリア人を指すと即座に了解されていたようである<sup>29</sup>。次に、この仮説とは異なる観点から第二の学説が提起された。ギリシアの歴史家ディオニュシオスは、エトルリア語がリュディア語と似ていないことから<sup>30</sup>、エトルリア人はイタリア土着の民であるという説を展開した。言語はもとより、宗教・法律・社会制度などに関しても、リュディア人と共通するものがないという論である<sup>31</sup>。事実、近代になって進められた古代リュディア諸都市の発掘からはヘロドトスの説を裏付ける考古学的証拠は何も現われていない。さらに別の視点から、第三の説として、エトルリア人は北方からイタリアに南下してきたという学説も提示されている<sup>32</sup>。

そもそも、エトルリア人の起源を探る問題設定のしかたが、純粋に学術的な意味で客観的であるかどうかを問うことから始めなければならない。彼らの出自を規定しようとする背景に、実はギリシア人内部のスタンスの違いが大きく関与していることに注意を払う必要があるのである。すなわち、リュディア起源説を採るのはエトルリア人と良好な関係にある一部のギリシア人の立場なのである。エトルリア人は実際にはヘレネス（ギリシア人）ではなくギリシア語を話さないけれども、彼らをギリシア世界の中に入れ、彼らをヘラス<sup>33</sup>（ギリシア全土）の地そのものに関連付けようとする姿勢である。片や、エトルリア人と対立していたシュラクサイのギリシア人は、エトルリアはもともとイタリア半島に居た土着民であるという見方をする。つまり、エトルリア人はヘレネスとは全く共通性のないバルパロイ（ギリシア語を話さない人々）であるとみ



エトルリア人に関する最も古い記述は、ヘシオドスの著した『神統記』の中の「ティレニア海の輝けるすべての民」である（紀元前7世紀初め）。ここでは、イタリアにおける非ギリシア人という意味合いで言及されている。実際、この時期（紀元前690年－680年）の最も古いエトルリア碑文に、すでにアルファベットで記された記録が残っている。これはエトルリア商人が商業地であるクーマエ（現ナポリ）近辺でギリシア人との交易から学んだものであると考えられている。

彼ら（＝エトルリア人）はピテクサイ（現イスキア島）とクーマエ（ナポリ湾）に入植した新しい隣人（＝ギリシア人）から受け入れたギリシア式アルファベットを用いて筆記できるようになった。次いで、彼らは自身の言語を記録し始めた<sup>41</sup>。

海洋民族として、エトルリア人は日常的にエトルリア語とフェニキア語を使っていたとされるが、その詳細は未だわかっていない。彼らはフェニキア・ギリシア系文字を採り入れ後にこれをローマ人に伝えた。

ギリシアから借用した文字がエトルリアに現われるのはやっと紀元前8世紀末のことである（ブリケル 2009:19）<sup>42</sup>。

エトルリア語は、このアルファベットで記述されているので文字自体は読む（音読する）ことはできる。例えば、人名・地名などの固有名詞を認めることができるし（Apulu「アポロン神」、Ruma「ローマ」など）、多くの墓標に記されている死者たちの名を判読することも難しくない<sup>43</sup>。

墓碑銘の例：avils lupu XXIIIX

「28歳にて没」（avil「年」、lupu「死す」）

mi larices telaθuras ouθi

「私は Larice Telaθura の墓（である）」

今日知られているエトルリア語の刻文は数千にも達する。「アグラム遺文」には 1,200 語もの単語が含まれており、他にもかなり長文のテキストが見つまっている。それにもかかわらず、今もって完全な解読には至っていない<sup>44</sup>。

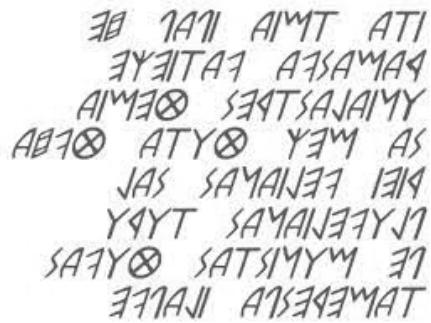
エトルリア人の生活を知るには、墳墓に納められたさまざまな品物および墳墓の壁に描かれた壁画に頼るしかない。墳墓の多くは地下に造られた大規模な空間で、大広間を模したその場所には芸術的な装飾を施した豪華な石棺とともに、家具・宝飾品などが納められている<sup>45</sup>。よく扱われるテーマとしては宴会の光景があり、これには二重の意味がある。実際の催しものを表わしているということ以外に<sup>46</sup>、宴会それ自体が宗教的な葬儀式典の一部になっているのである<sup>47</sup>。なお、これらの史料は主に貴族階級に属するものである。エトルリア文明に先行するヴィツラノーヴァ (Villanova) 文明ではこのような貴族の存在は見出されない。ヴィツラノーヴァとはボローニャ近郊の土地の名前に因っており、この当時（紀元前 900 年から 720 年頃まで）鉄器時代の社会である。エ

トルリアは紀元前 9 世紀から人口 200 から 300 の小村落を作って集まって生活していた<sup>48</sup>。



タルキニアの「寝椅子の墓」に描かれた音楽家

5.



古代イタリア半島で使われていたアルファベット系文字を地理的に分類し（北部・中南部・中東部）、そのうち中南部イタリアに属するのが、エトルリア文字<sup>49</sup>・ラテン文字・ファリスク文字・ウンブリア文字・オスク文字・シケル文字である。

エトルリア文字は、紀元前1千年期のイタリア北中部で栄えたエトルリア人によって用いられたギリシア系のアルファベットで<sup>50</sup>、紀元前7世紀から紀元前1世紀に及ぶ記録を残している。形状によって時代区分があり、紀元前6世紀以前のは Proto-Etruscan alphabet 「古期エトルリア文字」と、また、紀元前5世紀以降のものは Late-Etruscan alphabet 「後期エトルリア文字」と呼ばれるのが慣例である。エトルリア人はイタリア半島で最初に文字を使用した民族で、現在のイタリアのトスカナ地方（イタリア中部、州都はフィレンツェ）に住み、彼らはその地で豊かな文明を築き、質の高い絵画や彫刻などを残した<sup>51</sup>。その中には夥しい数の碑文が残されていて、そのテキストに使われている文字が形状としてはギリシア文字に近い<sup>52</sup>。エトルリア人は紀元前8世紀後半に、イタリア南部（ナポリ湾）のクーマエおよびその周辺に植民していたギリシア人から文字を借用したとみるのが定説である<sup>53</sup>。

「古期エトルリア文字」の中でも最古のものは、マルシリアーナ（Marsiliana

d'Albegna、ジェノアの近く)で発見された象牙の文字盤(紀元前7世紀前半)である。これにはエトルリア・アルファベットの原型26文字が完全な形で保持されている。



これは象牙の学習用書版の淵(上側)に書かれていて、エトルリア人はギリシア文字を忠実に受け入れていることがわかる。ギリシア文字をモデルとしており、ここにエトルリア人の手によって改変が加えられた形跡はほとんどないと言ってよい。この文字列のうち、例えばB, Dはエトルリア語では不要の文字ではある。なぜなら、有声閉鎖音の系列(b-d-g)はエトルリア語にはないからである。また、母音は/a, e, i, u/の4母音体系であるため、Oという文字が使われることはない。なお、ギリシア語やセム語にないエトルリア語に特有な摩擦音/f/に対してはFHが用いられた。

紀元5世紀以降に、エトルリア文字にはかなりの変容が加わり「後期エトルリア文字」の時期に入ることになる。具体的には、Xが(やはり/s/の音価をもつMとの重なりから)姿を消し、また、摩擦音/f/を表わす文字として(FHに代わって)新しく数字の8に似た字形の文字がアルファベットの最後に付け加えられた<sup>54</sup>。



a) Archaic Script

Α	Β	Γ	Δ	Ε	Ϝ	Ζ	Η	Θ	Ι	Κ	Λ	Μ
a	b	c	d	e	v	z	h	θ	i	k	l	m
Ν	Ξ	Ο	Ρ	Σ	Ϙ	ϙ	Ϛ	Τ	Υ	Χ	Φ	Ψ
n	ξ	o	p	ś	q	r	s	t	u	ś	Φ	χ

b) Late Script

Α	Γ	Ε	Ϝ	Ζ	Η	Θ	Ι	Λ	Μ
a	c	e	v	z	h	θ	i	l	m
Ν	Ρ	Σ	ϙ	Τ	Υ	Φ	Ψ	Β	
n	p	ś	r	s	t	u	Φ	χ	f

古期エトルリア文字では一様に /k/ の音価を表わしていた C, K, Q の書き分けは  
 廃れ、後期エトルリア文字では基本的に C だけに統一されるようになった<sup>55</sup>。

なお、初期のエトルリア文字には、語の分かち書き  
 がなく（連続書体）であったが、紀元前6世紀以降、  
 あるいは：によって、語・音節を分ける書法が一般  
 化した<sup>56</sup>。

次のテキストは、ペルーシアの境界石柱（キップ  
 ス cippus）である（紀元前2～1世紀）。中部イタリ  
 アのウンブリア州の州都ペルーシアはエトルリア文  
 明が栄えた町で、この石柱の2つの面には46行・130  
 語の銘文が刻まれている<sup>57</sup>。



さて、エトルリア語について、その文法の詳細はあまりわかっていない<sup>58</sup>。エトルリア語の言語文化に関し、確実に言えるのは次の諸点のみである。

- ①エトルリア語の文字はアルファベット大体系中の1変種にすぎないが、今日、世界で広く使われているラテン文字の形成に一役買った文字体系である。
- ②エトルリア語は今のところ既知の特定の語族と結びつかず、その結果として、この言語で書かれた銘文が十分には解読されていない。
- ③エトルリアの文献で今日まで伝わるものは一つもなく、手に入る古代の資料はギリシア・ローマの文人の著作のみである。

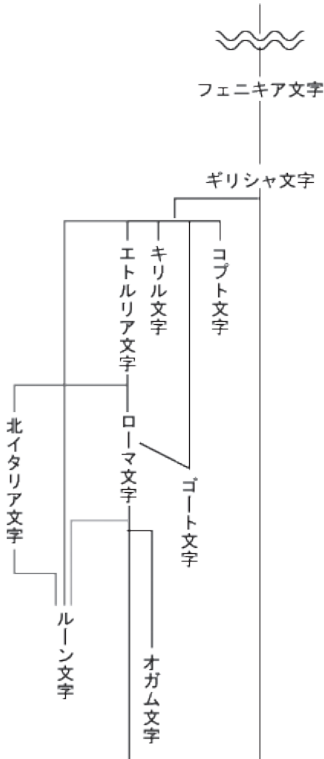
エトルリア人と括られる部族群はそもそも共通のアルファベットを使ってはいたが、共通の言語を話していたわけではなく文法も異なるいくつかの言語を用いていたと捉えるのが現実的である。

ここでは、エトルリア語の書記体系に絞り、その系統関係に関する歴史的関連に関し考察することにする。史実からも明らかのように、ギリシア人は海洋民族として地中海近辺で活動していたから、イタリア中部にいたエトルリア人に影響を与えたという可能性は十分にある<sup>59</sup>。同じく海洋民族であったエトルリア人も同様に海洋貿易で活躍し<sup>60</sup>、紀元前7・8世紀にギリシア人・フェニキア人の貿易商と覇を競っていた<sup>61</sup>。

ところで、ギリシア人・ローマ人は、エトルリア人を海賊（交易を行いつつ機会があれば競合者の船や居住地を襲う海洋の民）として記している。実際、エトルリア人は、ギリシア人と、西方の人びと（ギリシア人から見ればバルバロイ）との間の中心的な仲介者としての役割を果たしつつ、都市の文化（＝書字術を含む文明）をイタリアをはじめとするヨーロッパの多くの地域の民にもたらしたのである<sup>62</sup>。併せて、エトルリア人は、カルタゴの住人であるフェニキア人と商業・政治の面で同盟関係にあり、フェニキアからの影響はエトルリ

ア文化・芸術・宗教にとって重大であった<sup>63</sup>。

こうした諸文明同士のお互いの交流を背景にして、後代のローマのラテン文字が、その元を辿ればエトルリア文字に遡ることになるのを示したのが次の図表である（都市国家エトルリアも紀元前3世紀にローマに制圧される歴史である）<sup>64</sup>。



さらに、具体的に文字の形状を比較しつつ図式化したのが次表である、すなわち、エトルリア文字を仲介として間接的にギリシア文字を継承したラテン文字を出発点として（一番右端に置いて）、古くフェニキア文字までを（左に進むにつれ）遡る、文字の形状の変遷経緯を示す図表である。この中、ギリシア語の場合、およそ紀元5世紀に、17の子音と7つの母音からなるアルファベツ

トがあった。文字には大文字・小文字の2種があり、石などに刻まれる時には大文字が用いられ、パピルスや蠟盤に書く時には小文字が使われていた。ギリシア人は蠟を石盤に塗り鉄筆で文字を書いていた。

Phoenician (the Mesa alphabet and its variants c. 850 B.C.)		Greek (the Samos alphabet c. 660 B.C.)		Etruscan (Marsiliana c.800 B.C. and later variants)		Latin	
Name	Sound value	Name	Sound value	Name	Sound value	Old-Latin	Classical Latin
alf	𐤀 A guttural	alpha	Α a	a	AAA a	AAA	A
bet	𐤁 B b	beta	Β b	b	B (b)	B	B
geml, gaml	𐤂 G g	gamma	Γ g	g	ke, ka 𐌆𐌆 k(g)	𐌆	C
delt	𐤃 D d	delta	Δ d	d	de 𐌇 (d)	𐌇	D
he	𐤄 H h	epsilon	Ε (short) e	e	eee e	eee	E
uau	𐤅 W w	uau	Ϝ w	w	ve 𐌆𐌆 v	𐌆	F
zajin	𐤆 Z z	zeta	Ζ z	z	𐌆𐌆𐌆 z	-	Z
chet	𐤇 KH kh	eta	Η (long) e	e	𐌆𐌆𐌆 e	𐌆	H
thet	𐤈 TH th	theta	Θ th	th	𐌆𐌆𐌆 th	-	-
jod	𐤉 J j	iota	Ι i	i	i 𐌆𐌆 i	𐌆	I
kaf	𐤊 K k	kappa	Κ k	k	ka 𐌆𐌆 k	𐌆	K
lambd	𐤋 L l	lambda	Λ l	l	el 𐌆𐌆 l	𐌆	L
mem	𐤌 M m	my	Μ m	m	me 𐌆𐌆 m	𐌆	M
nun	𐤍 N n	ny	Ν n	n	ne 𐌆𐌆 n	𐌆	N
semk, samekh	𐤎 S (ks)	(ksi)	Ξ ks	ks	(s) 𐌆	-	-
hayin	𐤏 guttural	omikron	Ο (short) o	o	oo 𐌆 (o)	𐌆	O
pe	𐤐 P p	pi	Π p	p	pe 𐌆𐌆 p	𐌆	P
sade	𐤑 S (ts)	-	-	-	𐌆𐌆𐌆 s	-	-
qof	𐤒 Q q	koppa	Ϙ q	q	𐌆 q	𐌆	Q
rosh, resh	𐤓 R r	ro	Ρ r	r	re 𐌆𐌆 r	𐌆	R
shin	𐤔 S (sj)	sigma	Σ s	s	se 𐌆𐌆 s	𐌆	S
tau	𐤕 T t	tau	Τ t	t	te 𐌆𐌆 t	𐌆	T
		ypsilon	Υ y	y	yy 𐌆 u,y	𐌆	V
		phi	Φ f	f	φ 𐌆 ph	-	-
		khi (West Greek X=ks)	Χ kh	kh	𐌆 s	-	X
		psi (West Greek)	Ψ ps kh	ps kh	𐌆 𐌆 kh	-	-
		omega	Ω (long) o	o	-	-	-
					𐌆 f		G
					𐌆 s		Y

文字の系統としては、古代イタリアの文字はすべてエトルリア文字から派生しており、先の図が示す通り、ウンブリア文字・オスク文字・ファリスク文字・シケル文字がエトルリア文字の系列に入る<sup>65</sup>。1世紀のはじめ、北イタリア・アルプス地方には、いくつかのアルファベット、すなわちエトルリア文字の変種が実在していた。北イタリアの文字とは、古代レティア（Rätien）のアルプス地方およびポー川平野の東部で、紀元前5世紀から紀元後1世紀まで使用されていた文字のことである<sup>66</sup>。トスカナ地方のエトルリア文字に近いので、北エトルリア文字と呼ばれることもある<sup>67</sup>。

	Rätische Alphabete			Lepontisch	Venetisch	Etruskisches Vorbild
	Bozen	Malgrè	Sondrio			
a	△△△△△	△▽△	△▽△	▽▽△△△ △△△△	△△△	△ △
e	≋≋≋	≋≋≋	≋ ≋	≋ ≋ ≋	≋	≋ ≋
v	▽▽▽▽	▽▽			▽	▽▽
z		≋ ?	≋ ≋ ≋	≋	× ×	≋ ≋ ≋
h	≋	≋			≋ ≋ ≋	≋ ≋
th	≋	≋ ≋	≋ ?		○ ×	○ ×
i	∟	∟	∟	∟	∟	∟
k	× ×	× × ×	×	× × ×	×	× ∟ × ∟
l	∟	∟	∟	∟	∟	∟
m	∟	∟ ∟	∟ ?	∟ ∟ ∟ ∟	∟	∟ ∟
n	∟	∟ ∟ ∟	∟ ∟ ?	∟ ∟ ∟ ∟	∟	∟ ∟
o			○ ?	○ ○ ○ ○	○	
p	∟ ∟ ∟		∟	∟	∟	∟ ∟
3 (san)	∟	∟ ∟	×	× ∟ × ∟	∟	∟ ×
r	∟ ∟	∟ ∟ ∟ ∟		∟ ∟ ∟	∟ ∟	∟
s	× ∟ <	< ∟ ×	<	× ∟ × ∟	< ∟	× × ∟
t	× ∟ ×	× ∟ ∟	×	× ∟	× ∟	× ∟ ∟
u	∟	∟ ∟	∟ ∟ ?	∟ ∟ ∟ ∟	∟	∟ ∟ ∟
ph	○ ∟ ○ ?	○ ○ ○		○ ?	○ ○ ○ ?	○
kh	∟ ∟ ∟	∟		∟ ∟	∟ ∟ ?	∟ ∟
ī, e				∟ ?	∟	
φ		≋ ≋				

表の左側からレティア文字のボーツェン (Bozen)・マルグレ (Malgrè)・ソンドリオ (Sondrio) のアルファベットが示され、次にレポント文字・ヴェネト文字が続き、表の右端に、これら諸文字のモデルとなったとされるエトルリア文字が表記されている。

北イタリアの諸文字の形状はお互いかなり類似している<sup>68</sup>。レティア人 Räter, イリュリア人 Illyrer, ヴェネト人 Veneter 等のアルプス地方の諸民族を地理的に見ると、

1. レティア文字 (ケルト語・レティア語を筆写する)

- 1) ボーツェン (Bozen)・マルグレ (Malgrè)・ソンドリオ (Sondrio) のアルファベット
- 2) レポント文字 (ルガノ Lugano の文字)

2. ヴェネト文字<sup>69</sup>

印欧語のヴェネト語を筆写するのに用いられた。

の通りで、これら全体で 500 弱の銘文 (大部分は短い献辞) を残している (紀元前 400 年～紀元後 200 年)<sup>70</sup>。北イタリアの諸文字は確かに紀元前 2 世紀頃からラテン文字の強い影響を受けることになる<sup>71</sup>。

北イタリアの文字に見られる諸特徴は以下のようである<sup>72</sup>。

- 1) 書く方向が①左から右へ②右から左へ③牛耕式の 3 種類である。
- 2) いくつかの点あるいは垂直線を引く句読法を用いる。
- 3) 「～が～を作れり」タイプの銘文が多い。
- 4) 二重子音が単子音で書かれる正書法である。
- 5) エトルリア語・ヴェネト語にアルファベット一連 (すべての文字を一列に並べた文字列のこと) の銘文がある。

現在のオーストリア・スイス・イタリアの山岳地帯に広がる「レト・ロマンス語」圏あたり、つまりグラウビュンデン州近辺の先住民の系統的由来に関して決定的なことはあまりわかってはいないが、レト・ロマンス語は、少数言語で

ありながらも根強い文化基盤を有しており、およそ 2000 年もの間、独自の歴史を誇っていることがわかっている。現在、レト・ロマンス語のうち、スイス連邦内の言語はロマンシュ語と称され<sup>73</sup>、スイスの国語・公用語であり、スイスの文化に少なからず貢献しているわけであるが、アルプス山中のロマンシュ語圏の文化は、その溪谷と山が多い地理的条件、独特な歴史がその言語に強く影響を与えていることで知られている<sup>74</sup>（スイス連邦外のイタリア・アルプスに、レト・ロマンス語系のラディン語・フリウリ語が分布している）<sup>75</sup>。レト・ロマンス諸言語の総称は実に「レティア語」と呼ばれている謎の言語に由来するとする学説もある（Deplazes 1987:10）。もっとも 1990 年代にレティア民族の同質性を疑う見方（Wanner 2012:79）も提出され、そのような祖語的な言語の存在も問い直すべきではある。それにしても、レト・ロマンス語と言う際の「レト」はケルト系のレト族が住む土地「レティア」という名に由来するのは間違いない。現在のスイス・グラウビュンデン州に当たる地域周辺に、紀元前、つまりローマ時代以前、どのような民族が生活していたのかは明らかではないが、ロマンシュ語に残っている、ラテン語にもゲルマン語にも由来しない語彙があるという事実は言語学的に解明が俟たれる点ではある<sup>76</sup>。

実際のところ、レティア人について従来さまざまな説があった<sup>77</sup>。これまで長い間、単一の民族で、ケルト人あるいはセム系民族であったのであろうと考えられてきた。古代にアルプス山脈で生活していたと思われるこの民族は、東アルプスの諸民族の先祖と想定されていた<sup>78</sup>。ただ、最新の研究によると、「レティア人」は、単一の民族ではなく、文化的にも政治的にも関連性が極めて低い諸民族の総称であったのではないかとされている（Wanner 2012: 79）。このように、スイス・北イタリアのレト・ロマンス語の由来を巡る議論は未だ片が付いているわけではない。いずれにせよ、レト・ロマンス語の背景に非ラテン語的な要素があることは確かである。考古学的にも、北の地域やスルセルヴァ谷においてケルト文化の遺跡が、南に向かう谷においてゴラセッカ文化（Golasecca）の遺跡が、そしてエンガディン地方においてレティア文化の遺跡



がいくつか見つかっている (Deplazes 1987:3-10)。レティア人の言語に関しては今日に至ってもあまりにデータが乏しく、どの語族に属するのかさえ判断がついていない<sup>79</sup>。このようにレティア人の真相は今なお明らかにされてはいないとは言え、次のような言説が語られている：「レティア人はエトルリア人の子孫であり、ガリア人によって追い立てられた際、その大将レトゥスの下でアルプス山脈の奥へ逃げ込んだと思われる。[...] レティア民族の中ではヴェンノネースイ族とサルネーティ族がライン川の泉の辺りにおける [...]」。いずれにしても、イタリア半島における孤立した言語とみなされてきたエトルリア語が、オーストリア・スイス・イタリアにまたがるレト・ロマンス語と関係があるとする学説は学術的に興味深い<sup>80</sup>。

さて、ここまでこの節で見てきたように、エトルリア人はローマが勃興する前からイタリアに多くの都市国家を築き<sup>81</sup>、今日のヨーロッパ文化にエトルリアが与えた影響は大きい。本節のテーマである文字体系の変遷経路に関して振り返ってみても、ローマがギリシア文化を取り入れた際、文字など文化的な面に限れば直接ギリシアからではなくエトルリアを通してである。エトルリア文化はローマに吸収されて今日に伝わっているという意味では、エトルリアはヨーロッパ文化の基礎を形成しているとも言えよう。



タルキニアの「寝椅子の墓」に描かれた踊り手（紀元前 470 年頃）。二人は美しく着飾ってあの世への踊りを踊る。

上で見たエトルリア最古の文字盤の表（マルシリアーナ Marsiliana）が示すように、紀元前 7 世紀にはエトルリア語の文字化がなされていたという歴史は、たとえ、それがギリシア文字の改良であったにしても、自国語に適した文字の使用として、諸文明の中でもかなり早い時期のものである。次節では、その文字（エトルリア文字）



れている<sup>88</sup>。しかしながら、エトルリア語がインド・ヨーロッパ諸語が確立される以前に地中海沿岸で使われていた諸言語の基層に属するものと考えてほぼ間違いない<sup>89</sup>。実際問題として、エトルリア語で書かれた銘文が未だに十分には解読されておらず<sup>90</sup>、エトルリア語の言語遺物は何千に達するといっても、その多くは似たり寄ったりの墓碑銘であるという点が挙げられる。

“The Etruscans adopted writing, and left behind them thousands of inscriptions, but no literature.” (Bonfante<sup>2</sup>2002:5-6)

エトルリア人の墓から出土する考古資料の膨大な数に比べるなら、文字資料が少なく、エトルリア人自身が書いた文献資料は皆無という、ギリシア・ローマ文化とは大きく異なる状況である。おそらく、このことが今も「謎のエトルリア文化」という言葉になお私たちが現実味を感じる理由なのではないだろうか<sup>91</sup>。

概して次の一節が研究の現状を伝えていると言えよう。

„Die Wirklichkeit [ ... ] in der Erforschung des Etruskischen, das uns zwar immer noch schwere Probleme aufgibt, aber längst kein Rätsel mehr ist.“ (Pfißig 1984:11)

こうした視点を踏まえながらも、現段階で明らかになっているエトルリア語の文法の特徴を<sup>92</sup>、その系統関係も加味して、言語学的項目ごとに記述すると以下の通りである<sup>93</sup>。

## 7.

### 音構造

母音については、/o/ が欠けた4母音体系である (/a e i u/) <sup>94</sup>。語中における母音の弱化・消失が著しく（例：Menelaos > Menle）、語頭に強弱アクセントがあったと推定されている。また、二重母音としては、ei, ai, au, ui がある。

子音に関し、閉鎖音の系列（無声音・有声音・無声帯気音）のうち有声音（b-d-g）はなく、次表の通り、無声無気音と無声帯気音の対立関係がある。破擦音として、s と ś の区別がある。また、摩擦音 /f/ を表記する、数字の8に似た形状の文字がある。

	両唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音
閉鎖音	p, p <sup>h</sup>	t, t <sup>h</sup>		k, k <sup>h</sup>
摩擦音	f	s	·	
鼻音	m	n		
流音		r, l		

### 名詞類

名詞には、単数・双数・複数の数の区分がある <sup>95</sup>。格は、主格・対格・属格・与格・奪格 <sup>96</sup>・位格・具格・呼格 <sup>97</sup> からなる。

主格の例を、在証されているテキストの中から実例として示すならば次のようである。

eca      sren      tva      iɣnac      hercle [...]  
 この      絵が      示す      いかにか      ヘラクレスが  
 「この絵は、いかにかヘラクレスが[...]を示している」

属格には2種類の語形があり、① -s/-ś 型、② -(a)l 型である。

fler 「聖像」 → fler-ś 「聖像の」 (属格)

rasna 「民衆」 → rasnal 「民衆の」 (属格)

次に clan 「息子」をサンプルとして曲用の概観を示すと、まず複数形の標示は -(a)r, -er, -ur, -r という接尾辞によってなされ、

clan 「息子」 (単数) : clen-ar 「息子たち」 (複数)

ais 「神」 (単数) : ais-er 「神々」 (複数)

となり、

ci clen-ar 「3人の息子たち」 (複数)

等と表現される<sup>98</sup>。ただし、複数語尾は必ずしも義務的ではなく、数詞を伴う名詞においては省略されることもしばしばある。

ci avil 「3年」 (単複同形)

śa śuthi 「4つの墓」 (単複同形)

格の標示も接尾辞によってなされるが、基本的に主格・対格の区別はされず、共に無標のゼロ格で現われる。

例 : clan 「息子」

	単 数	複 数
主格	clan	clen-ar
属格	clen-s <sup>99</sup>	clen-araśi
与格	clen-śi <sup>100</sup>	clen-ar-śi
対格	clan	clen-ar
位格	clen-thi	

数（複数のマーカー：-er）の標示の後に、格を示す接尾辞が付く。例えば、

methlum 「国」（単数主格）

methlum-er-ś 「国々の」（複数属格）

ais 「神」（単数主格）

eis-er-aś 「神々の」（複数属格）

接尾辞のうち特徴的なものを挙げれば、-l は、人または体の部位を示す、属格・与格・位格のマーカーであり、-al は所有を表わす。

## 形容詞

形容詞は名詞に先行したり、

vaxr lautn 「弱い人間」

弱い 人間

名詞の後に置かれたりする。

arθ vaxr 「小さい指関節」

指関節 小さい

### 比較級・最上級

形容詞の比較級・最上級はそれぞれ次のような語尾を付ける。

比較級：-ze, -za, -isa, -štés

(例) halx-ze

halx-za

špan-za

最上級：-štś, -ś<sup>01</sup>

### 現在分詞・過去分詞

現在分詞：-nt, -nte, -ane, -une

過去分詞：-en, -ne, -na

### 数詞

基数詞・序数詞ともに格変化が見られる。

#### 基数詞

例	「2」	「60」	「50」
主格	θui		
属格		cealxuś, cealxus	cialxuś
与格			
対格	θui	cealx, cealxuz	

表の中の cealxuś のように、数詞が名詞として用いられ属格の形態をとる。

### 序数詞

例	「2番目の」
主格	
属格	
与格	θuim
対格	θuiu

### 代名詞

主格・対格の区別は代名詞で明確に見られる。例えば人称代名詞で、主格「私が」: mi, 対格「私を」: mini といた具合である<sup>102</sup>。

### 人称代名詞

	単 数	複 数
1 人称		
主格	mi	
属格		
与格		
対格	mini	

mi (主格「私が」), mini (対格「私を」) が在証されるのは主に紀元前6世紀以前の古期のテキストにおいてである。例証としては、

mi      θanyvilus  
 私が<sup>s</sup>    所有 (者)  
 「私が~の所有者である」

mini            mulveneke    velθur    pupliana  
 私 (容器)    贈った  
 「私<sup>103</sup>を Velθur が<sup>s</sup> Pupliana に贈った」



	単 数	複 数
2 人称		
主格		
属格		
与格		iśvel
对格		

	単 数	複 数
3 人称 (男性)		
主格	-xe	hia
属格	xiś	
与格	xim, xiem	icni
对格		

	単 数	複 数
3 人称 (女性)		
主格		ceia
属格		hia
与格		
对格	cei	

	単 数	複 数
3 人称 (中性)		
主格		
属格	ital	
与格		
对格	ita	

## 動詞

動詞の語幹、例えば tur-「与える」に -u や -ce などの語尾が付けることにより活用形が作られる。

tur-u「与える」(現在形) : tur-u-ce「与えた」(過去形)

以下、動詞の屈折活用形をまとめると以下の通りである。

### 現在

#### 直説法

	単 数	双 数	複 数
1.			
2.	-is		
3.	-iθ / -θ		

#### 仮定法

	単 数	双 数	複 数
1.			-ima
2.			
3.			

#### 命令法

	単 数	双 数	複 数
1.			
2.	-t	-ts	
3.			

受動態は、次の通りの語形である。

直説法

	単 数	双 数	複 数
1.			
2.	-(a)śa, -asa		
3.	-te		

仮定法

	単 数	双 数	複 数
1.			
2.			
3.	-ase		

未来時制は通常、現在形で表わされるが、次のような語形 (-tnam) もある。  
動詞の語根に -tnam 「～することになっている」を付け、

pu-tnam 「膨らむであろう」(pu : 「膨らむ」)

弱変化動詞は、以下のように4つに区分される。

第1弱変化動詞

直説法

能動態

	単 数	双 数	複 数
1.			
2.	-is		
3.	-iθ, -θ		-θ

受動態

単 数

双 数

複 数

- 1.
- 2.
- 3.

-iasa

第2弱変化動詞

直説法

単 数

双 数

複 数

- 1.
- 2.
- 3.

-uθ

-uθ

命令法

単 数

双 数

複 数

- 1.
- 2.
- 3.

-a, -c

第3弱変化動詞

直説法

受動態

単 数

双 数

複 数

- 1.
- 2.
- 3.

-te

#### 第4弱変化動詞

##### 直説法

###### 能動態

	単 数	双 数	複 数
1.			
2.	-n		
3.			

be 動詞 (etnam) は、以下のものである。

##### 直説法

	単 数	双 数	複 数
1.			
2.		aras	
3.	sin, ama, ame		ara, ar

##### 仮定法

	単 数	双 数	複 数
1.			
2.			
3.	amce		

##### 前置詞

名詞の後に置かれることもある。「動作」を表わす場合は名詞の対格と、また、「静止」を表わす場合は名詞の与格と用いられる傾向がある。

af 「～の中から」

an 「～の上に」

anc 「～の（頂）上に」

aper 「～を越えて、～から離れて」

in 「～の中へ」

inc 「～の中で」

naxva 「～の隣に」

perpri 「～を通して」

ananc 「～の頂上で、～の頂上から」

cisva 「～の側から」

ininc 「～の内側で」

### 接続詞

avil 「～の間に、～する一方」

na-naa 「～でなければ、～ない（相関的に）」

ipa 「～の時に、こうして、その結果」

ipe-ipa 「～する、まさにその時に（相関的に）」

### 語形成

基本語順は SVO<sup>104</sup> であるが、格標示があるため、語順に一定の自由度がある。基本的に接尾辞を付加する「膠着語」的タイプである。

名詞などで複合語を形成する場合がある（例：hareutuše 「相続人・子孫」）。

接頭辞としては、avθ-「再-」、es-「(～から)出(る)-」、tra-「(～を)通(る)-」などがある。また、接尾辞には、方法・場所を示す -cve, -cva, -xve, -xva や 類似性を表わす -lxne がある。

## 8.

これまでに知られているエトルリア語の語彙数は確かに多くはないが、数詞や親族名称など重要な基礎語彙が含まれてはいる<sup>105</sup>。

数詞に関しては、<sup>さいころ</sup>賽子（1～6の数詞が記されている）が古く発見され、早期から個々の数詞をめぐる研究はかなり進んでいると言える。現在、これら6つの数詞の意味は確定し、数詞関係では、-alc, -alx が10の倍数を示す語尾、および、-is が序数を形成する語尾であることがわかっている。

thu「1」、zal(esal)「2」、ci「3」、śa「4」、makh「5」、huth「6」、śar「10」、zathrum「20」、cialkh「30」

さらに、ラテン語の *due-de-vinginti* (18 = 20-2) や *un-de-vinginti* (19 = 20-1) 等のような引き算方式の表現法はエトルリア語の影響と言われている (18: *esl-em zathrum*, 19: *thun-em zathrum*)。

親族名称については、残っている言語データの大部分が墓碑銘であるため、その意味で情報量は比較的豊かである。

父: *apa*, 母: *ati*, 息子: *clan*, 娘: *sekh*, 兄弟: *ruva*, 妻: *puia*

ただ概して、エトルリア語の言語資料はほとんど宗教、特に葬儀関係（墓碑銘など）に限られており、表現パターンも型にはまったものが多い。こうした言語データだけを元に文法構造の全貌を知るのは確かに困難である<sup>106</sup>。現存するエトルリア語の碑文資料（紀元前7～1世紀）の数は1万3千にも及ぶが、大部分は短いテキスト（墓碑銘）でその大半を固有名詞が占める<sup>107</sup>。こうした状況下、近年では、テキスト文脈に基づく構文の解析や、史料を文化的・社会的なコンテキストの枠の中で解釈しようとする試みが行われている<sup>108</sup>。

これまでの研究で、未知の言語を解読する際に有力な手掛かりとなってきたのは既知言語との対訳テキストで、エトルリア語の場合もこのアプローチが採られた。エトルリア語に関連するバイリンガルな資料としては、1964年にピルギ (Pyrgi) で発見された金の延べ板文書がある<sup>109</sup>。この3枚の金の延べ板

に刻まれた刻文の1枚がフェニキア語で書かれている。



このテキスト（紀元前 500 年頃）の内容は「カエレ<sup>110</sup>の領主<sup>111</sup>がユーノー・アシュタルテ女神に神域を奉納した」というもので、フェニキア語で 16 行（37 語）が、エトルリア語で 16 + 5 行が記されている。ただ、このバイリンガルのテキストも完全な対訳の形式ではないため<sup>112</sup>、若干の語彙の解釈には役立ったが、期待されたほどの成果をあげることはできなかった<sup>113</sup>。

#### 〈エトルリア語 テキスト〉

ita tmia icac he

ramašva vatieɣe

unial astres θemia



sa meχ θuta Θefa  
riei velianas sal  
cluvenias turu  
ce munis tas θuvas  
tameresca ilacve  
tul erase nac ci avi  
l χurvar, tešiameit  
ale ilacve alšase  
nac atranes zilac  
al, sel cita la acnašv  
ers itanim heram  
ve avil eniaca pulum χva.

この宮殿とこれらの像はアシュタルテ女神に奉納されている。  
これらは一族の人々によって建てられた。

[中略]

itanim heram ve, avile niaca pulum χva.

年月は星の数と同じくらい長くもちこたえるであろう。

〈フェニキア語 テキスト〉

l-rbt l-štrt,

アシュタルテ女神へ

ʾšr qdš ʾz, ʾš pʾl, w-ʾš ytn tbryʾ wlnš mlk ʾl kyšryʾ.<sup>114</sup>

ここは神聖な場所であり、Tiberius Velianas により作られ与えられた。

[中略]

w-šnt lm'š 'lm b-bty šnt km h kkb m 'l.

そして宮殿の中の聖なる像の年月は天の星の数ほどの長さであろう。

ところで、エトルリア語で書かれた最も長いテキストは、語彙数にして約1130語、宗教儀式関係の文書である（エトルリア語麻生文書 *liber linteus*<sup>115</sup>）。19世紀、クロアチア人1旅行者によって、エジプトからもたらされたミイラを巻いた、5枚の連続する麻布（35cm幅で340cmの長さ）の上に記されたテキストである<sup>116</sup>。



このテキストは紀元前3世紀の文書とされ、文としては短く断片的であるため解読が進んでいない。多くの神の名が記されおり、典礼規則などが記されているのではないかと推測されている。出だしの箇所は（断片で残っているだけであるが）、神(々)への祈りの部分である<sup>117</sup>。



具体的な記述の内容は以下のものである<sup>118</sup>。

FAC Le TvNAM.

作る そこで 雷

「私は雷鳴をとどろかす」

NAKFA [.....] REN

生まれた 女王

「女王が生まれた」

SFECe [.....] SIKNE SETI LVNE Ce

集まる ここに 印を付ける 席 月 ここに

「あなた方はここに集まる。[··]あなた方は月の席を確定する」



エトルリア語<sup>119</sup> 語彙集<sup>120</sup>

(A C E V Z H T H I L M N P R S S H T U P H X F の順)

A

エトルリア語	日本語
aberas	4月
ac	作る、提供する
acale	6月
acas	作る、(犠牲として)捧げる
acathur	少年
acazr	(墓に)捧げられる品
axapri	水差し
acil	生産者
aclus	6月
acnanas	(子を)もうける
ais	神
aisiu	神聖な
al	作る、提供する、捧げる
alice	一途な
alixa	贈り物
alpan	喜んで
alphaze	政務官
alumnathe	(聖なる)集団
am	～である (be動詞)
ame	捧げ物
ampile	5月
an	彼(女)
antha	鷲
apa	父
apana	父の
apcar	計算盤
ar	建てる
arac	鷹
arce	育った

arim	猿
ars	取り去る
as	捧げる
aska	(瓶などの)容器
at	(儀式などを)行う
athemica	親戚
athre	建物
ati	母
ati nacna	祖母
atran	司祭
avil	年
avilxa	毎年の

C

エトルリア語	日本語
-c	そして
-ca	その(定冠詞)
ca	この
calusu	優れた
camthi	治安判事
cana	(聖別された)品
cap	運び去る
cape	瓶
caper	オーバー
capi	瓶
capr	4月
capra	骨壺、棺
capu	鷹
car	建てる、作る
cautha	太陽(神)
cealx	30
cexa	儀式
cexase	治安判事
cel	地球、地面、土
cela	部屋

celi	9月
celius	9月
celu	(聖なる)捧げ物
celuca	埋葬
cep	神官
cepen	神官
cerixunce	建てた
cerinu	建てられた
ces	置く、確立する
cesu	埋められた
ci	3
ciz	三度
clan	息子
clanti	養子
cletram	かご
cleva	捧げ物
creal	治安判事
culixna	瓶
cupe	コップ
cver	贈り物
cvera	(彫刻などの)芸術作品

## E

エトルリア語	日本語
ein	いいえ、～ない、彼らが(を)
eis	神
eisna	神の
eleivana	油(の)
elu	捧げる、祈る
ena	今日
enac	その後、後で
enax	その後、後で
epl	～(の中)へ
ers	取り去る
esal	2
eshvita	後日
eslz	二度
eta	この

etera	奴隷、外国人
eterau	見知らぬ人
eteri	奴隷、外国人
etnam	そして、また
etr	～へ
etva	この

## V

エトルリア語	日本語
vacal	お神酒
velcitna	3月
velitna	3月
vers	火
vertun	瓶
vinum	ワイン

## Z

エトルリア語	日本語
zanena	カップ
zavena	(飲料用の)器
zathrum	20
zal	2
zatlath	仲間
zeri	儀礼
zil	支配する
zilac	行政
zilath	(文化)役員
zic	描く、書く
zinace	生産された(陶器など)
ziv	亡くなった
ziva	亡くなった
zix	描く、書く、刻む
zixu	作家
zixuxe	書かれた、刻まれた
zusle	犠牲(動物など)

## H

エトルリア語	日本語
hampha	右側
hamphe	5月

hante	～の前に
hanthin	～の正前に
hathna	幸福な
hec	置く、加える
hex	置く、加える
heramas	聖像
herma	場所、像
hermi	8月
heva	皆
hilar	区切られた
hintha	下に
hinthial	魂、幽霊
hinthin	退ける
hinthu	下の、地獄の
hiuls	梟
huin	泉
hupni	瓶
hupnina	瓶、棺
hus	少年
hushiur	子どもたち
hushlna	(取っ手付きの)壺 (甕)
husina	若者
huznatre	若者たち
huth	5, 6
huthzar	15

TH

エトルリア語	日本語
thafna	コップ
tham	建てる
thamna	馬
thap	聖別する
thapna	瓶
thaur	墓
thaurx	墓の
theuru	雄牛
thevru	雄牛
thes	持って来る
thesan	夜明け

theshviti	東に(で)
thez	(犠牲を)捧げる
thina	瓶
thruna	権力
thu	1, 2
thui	ここ、今
thuni	～の前に
thunxultha	私的な
thunz	一度
thuv	立てる
thuva	兄弟
thva	内(部)の

I

エトルリア語	日本語
ic	どのように、～のよ うに、～として
ica	この、あの
ilu	提供する、祈る
ilucu	期間
ipa	この、何(誰)であれ
ipu	何(誰)であれ
ishveita	翌日、後日
ister	俳優
ita	この、あの
itu	分ける
ix	どのように、～のよ うに、～として
ixnac	どのように

L

エトルリア語	日本語
laiva	左側
lantneteri	自由民
lasa	新婦
lautun	家族、人々、国家
lautn	家族、自由民
lautni	家族の
lautnitha	女奴隷、女自由民
lauxum	王
lauxumna	王家、宮殿

lertum	瓶
lertumuza	水差し
l ein	死ぬ
leine	～歳で
leinth	老齡
l es	提供する
l eu	ライオン
lucair	支配する
l up	亡くなる
lupu	亡くなった
l uri	明るさ

M

エトルリア語	日本語
mac	5
mal	与える
malak	奉納物
malena	(銅製の)鏡
malstria	鏡
man	墓、死者
mani	死者
manin	(死者に)捧げる
marish	少年、新郎
masculinena	鏡
mata	瓶
matam	上に、前に
matan	正面に、上に
math	(蜜入り)ワイン
max	4, 5
mean	児童期、青春期
men	提供
methlum	人々、地域
mex	人々、国家、婦人
mlac	奉納物
mlaca	よい、美しい
mlax	奉納物、よい、美しい
mul	提供する、誓う
mulax	奉納物
mulu	贈り物

muluvanece	奉納された
mulx	美しい、素敵な
mun	墓、異界
munis	寄付する、引き受ける
mur	滞在する、置く
murs	骨壺
mursh	骨壺
mutana	石棺
mutna	石棺
muvalx	40, 50

N

エトルリア語	日本語
nac	それから、なぜなら、なぜ
naper	境界線
naplan	(ワイン)瓶
nefts	甥、孫
nene	乳母
neri	水
nes	死人、死ぬ
nesna	死人の
netei	義母
nethshrac	腸 <small>ちようぼく</small> 下官(生け贄の獣の腸を調べて神意を占う神官)
netshvis	腸 <small>ちようぼく</small> 下官(生け贄の獣の腸を調べて神意を占う神官)
nuna	捧げ物
nurph	9
nurphzi	九度

P

エトルリア語	日本語
papa	祖父、祖先
papacs	祖父
papals	祖父の、孫
parla	瓶
parnix	行政長官
patna	瓶

penthna	石
penthuna	石
penza	低部
pera	家
pi	～で
prumathi	曾孫
prumaths	曾孫
prumats	曾孫
prumts	曾孫
prux	取っ手
pruxum	水差し
puia	妻
pul	～で
pulumxva	星
pupluna	人々
purx	独裁官
purth	独裁官
purthne	独裁官
put	(儀式を)行う
puth	泉

R

エトルリア語	日本語
rax	準備する
rasenna	エトルリアの
rasna	エトルリアの
rashna	エトルリアの
ratum	法に従うと
ril	～歳で
rumax	ローマの
ruva	兄弟

S

エトルリア語	日本語
sa	4
sac	聖別する
sacni	聖所、市民
sacniu	聖所
sacnisa	聖別する
san	祖先

santi	捧げ物
sar	10
sat	置く
sath	置く
scuna	場所
sealx	40
sec	娘
sel	行う、作る
sex	娘
semph	7, 8
sempalx	70, 80
snenath	女中、仲間
snuiaph	(聖なる)捧げ物、 (できるだけ)多く
span	低地
spanti	瓶、皿
spet	飲む
spur	都市
spurana	市民の
spureni	市民の
spuriaze	公共の
sran	装飾
srancaza	上部
sren	装飾
srenc	上の、上に
srencve	装飾された
suc	宣言する
sut	滞在する、置く
suth	滞在する、置く
suthi	墓
suthina	墓の
suplu	笛吹き
sval	生きる
sve	同様に

SH

エトルリア語	日本語
sha	4, 6
shar	10
shealx	40, 60



shians	始まり、型、計画
shran	姿形
shren	姿形
shrencve	装飾された
shuntheruza	(丸型の) 粘土箱
shurnu	秩序、誓約
shuth	置く
shuthi	墓
shuthina	(墓への) 贈り物

T

エトルリア語	日本語
ta	この
tam	建てる
tamera	神官、行政官
tamna	馬
tanasa	俳優
ten	(官庁業務を)行う
tes	世話をする
tesham	埋葬
teta	祖母
tetals	孫
tev	置く、示す
tevarath	審判、観察者
tesh	持って来る、治療する
tesham	治療する
tesinth	監督、世話人
teur	判決
tezan	道
tin	日
tinia	日
tinscvil	(聖別された)物
tiu	月
tiur	月
tiv	月
tivr	月
tmia	聖堂
tnam	見る
trepu	職人、大工

t rin	主張する
truna	権力
trut	(献酒などの)聖なる行為
truth	投げる
trutnut	予言者、神官
trutnuth	神官、予言者
tunur	単に
tuthi	共同体、与える
tuthin	公共の
tul	石
tular	石、境界
tularu	境界
tupi	石、罰
tur	与える、捧げる
tura	香料
turane	7月
turza	捧げ物
turn	捧げられた
tus	棺
tusna	白鳥
tusurthir	既婚者
tuti	共同体
tuthi	共同体
tuthiu	誓約
tuthin	公共の
tuthina	公共の、人々
Tv	見せる、見る

U

エトルリア語	日本語
ulpaia	瓶
upaia	瓶
una	流れ
une	それから
usil	太陽
ushil	太陽、南、正午
uslane	正午に
ut	与える、成し遂げる

PH

エトルリア語	日本語
phersu	仮面、俳優

X

エトルリア語	日本語
xulixna	コップ

F

エトルリア語	日本語
falatu	空
fan	聖別する
fanu	聖所
farth	持って来る
farthana	義理の(親縁関係)
fase	献酒
fasle	瓶
favi	墓、溝
fir	持って来る
fler	聖像、捧げ物、献酒
flere	聖像、神(性)
fleres	聖像
flerxva	(奉納)儀式
frontac	予言者
fulumxva	星
fufluna	人々
furthan	天才

## 註

- 1 西田 (2002:19)
- 2 柴田 (2003:18-22)
- 3 具体的には、経済原理によるもの、画一的な教育制度の強制などが挙げられるが、歴史的にはやはり軍事的な侵略によって引き起こされた場合が多い。
- 4 D.H. ロレンス (1987:5) 『エトルリアの故地』(奥井 潔 訳) 南雲堂。ローマにおけるエトルリア文明の痕跡はさまざまな面で明瞭である。例えば、低湿地ローマの土地を排水しローマを湿地から開放した、(最大の) 下水工事 (クロアカ・マキシマ Cloaca Maxima、紀元前 6 世紀頃) もエトルリア人技術者の手によって建設されたものである。
- 5 紀元前 9 世紀にその存在が確認でき 1 世紀まで使用されていたとされる。
- 6 約 7500 のテキストが残されている (Rix 1985:210)。紀元前 7 世紀から紀元後 1 世紀に及ぶものである。
- 7 ペルージャ (Perugia)・パドヴァ (Padova)・シエナ (Siena) などの地名はエトルリア起源である。
- 8 古代イタリアで古い文字資料を残した諸民族の言語はすべて印欧語系である。エトルリア語は系統が不明である。
- 9 ボンファンテ (1996:18)
- 10 terra cotta (イタリア語) : 「泥焼・素焼」の意。
- 11 矢島 (1999:90ff.)
- 12 ブリケル (2009:9)
- 13 ボンファンテ (1996:5)。Bonfante (22002:5-6) : 「エトルリア語の史料の多くが墓碑銘であるという点もある」 (“The Etruscans adopted writing, and left behind them thousands of inscriptions, but no literature.”)。
- 14 テュイリエ (1994:46)
- 15 都市同盟 (「エトルリアの十二の都市」という名) の 1 つ ウォルシニイ (現在のオルヴィエート) 内のボルセーナ湖近くの聖地ファヌム・ヴォルトウムナエで民族集會が開かれていたことが文書史料から知られているが、この聖地そのものはまだ発見されていない。
- 16 古代の著述家の多くが、どのようにエトルリア王たちがローマで追放されたか (そして、どのように共和政ローマがつくられたか) を記している。
- 18 エヴァンズ Evans (2013:49)

- 19 こうした工芸品などに製作者の名前が記されることがある。

mine zineke kavie  
私を 作った Gavius

「私（工芸品）を Gavius が作った」

- 20 ボンファンテ・ラリッサ (1996:15-16) 『エトルリア語』(小林 標 訳) 学芸書林

- 21 エトルリア 3 大博物館は、フィレンツェの考古学博物館・ローマのヴィラ・ジュリア博物館・ヴァチカンのエトルリア美術館である (テュイリエ 1994:31)。

- 22 テュイリエ (1994:1)

- 23 「ローマ建国史」によれば、ローマはロムルスとレムスの双子の兄弟によって紀元前 753 年に建設されたことになっている。古代ローマは初代王ロームスルから 7 代続く王政を経て、紀元前 509 年からは選挙で選ばれた 2 名の執政官による共和政に移行し、ローマ帝国となる紀元前 27 年まで徐々に勢力範囲を拡大していく。紀元前 272 年にはイタリア半島を統一、さらにポエニ戦争 (紀元前 264 年～紀元前 146 年) を経て、ローマ帝国の覇権は地中海の沿岸諸地域へと及ぶことになる。

- 24 エトルリア人は海を往来する民族でもあり、古代地中海世界の至るところからその存在が記述されている。一説には古代エジプト第 20 王朝に記述のある「海の民」はエトルリア人ではなかったかとも言われている。

- 25 ブリケル (2009:31-32) : 「エトルリア人の起源の問題は非常に厄介なものに思われる。そしてそれぞれの説を支持するのに持ち出された近代の学者の議論といえども、より明確な見解を出すには至っていない。いずれの説も決定的ではなく、いずれの説も反駁が可能である」(La problématique des origines étrusques apparaît singulièrement compliquée. Et ce ne sont pas les arguments apportés à l'appui de chacune des thèses par les savants modernes qui permettent d'y voir plus clair: aucun n'est décisif, tous peuvent être retournés.)。『エトルリア人』(平田隆一 監修・斎藤かぐみ 訳) 白水社 (文庫クセジュ)

- 26 エトルリア人はギリシア人からはテュレニア人 Tyrrhenoi と呼ばれていた。



- リュディア：紀元前 6 世紀、最後の王クロイソス時代のリュディア。赤線は紀元前 7 世紀の境界。リュディアは紀元前 7 世紀から紀元前 547 年まで王国として栄えた。
- 28 リュディアとは、古代小アジア西部アナトリア半島（現在のトルコ）のリディア地方を中心に栄えた王国のこと。首都サルディス。インド・ヨーロッパ語系のリュディア Lydia 人が建てた王国で、前 7 世紀初頭のフリュギア王国の滅亡後盛期を迎えた。土地は肥沃で、アジアとヨーロッパの商業路の要衝に当たり、ミダス伝説にみられるように黄金に富み、最古の鑄貨を作ったとされる。
- 29 ボンファンテ (1996:12)
- 30 Woudhuizen (1991) を参照。
- 31 『ローマ古史』第 1 巻、28-2 には「いかなる種族とも言語を同じくしない」と記されている。
- 32 ボンファンテ (1996:12-13)
- 33 ギリシア人の土地。
- 34 そもそもエトルリア人と総括的にまとめられる人種はなく、共通の文化（例：文字）をもったさまざまな由来をもつ部族らの総称と捉えるのが現実的かもしれない。
- 35 ブリケル (2009:36-37)
- 36 エトルリア人は歴史の幕開けから民族的に一体性を示すような連合を形成していた、すなわち、この民族的一体性は 12 都市連合の形をとり、連合は一柱の神への礼拝を共同で行うために集合していた（ブリケル 2009:45）。
- 37 テュイリエ (1994:46)
- 38 ブリケル (2009:25-26)
- 39 ペルシアが小アジアを征服した後、多くのギリシア人がイオニア地方からエトルリアへ避難したという事情もある。
- 40 ラッチェ (1982 :11-12)。ラッチェ (1982 :13-14)：「村落から都市国家ポリスへゆっくりと移行したことは考古学的調査により追跡することができます。[...] 紀元前 8 世紀から 5 世紀はエトルリアにとってはギリシアとオリエント（フェニキア）の風俗習慣を絶え間なく取り込んだ時期でした。新しい文化を自分の物にした最初の人々は権力者たち、支配階級で、まさにこの階級が考古学遺物の中に多くの手がかりを残したのです」。
- 41 ボンファンテ (1996:14)

- 42 ブリケル (2009:19) : 「エトルリア人がその言語と文字を用いて書き、彼らが何者であるかを確定できるような碑銘文はわれわれには残されていない」。
- 43 矢島 (1999:88)
- 44 矢島 (1999:88-89)
- 45 世界遺産のチェルヴェーテリ (Cervetri) とタルクイーニア (Tarquinia) の墓地遺跡群の内壁に描かれた壮大な壁画は生活にかかわるさまざまなテーマが主題となっている。
- 46 実生活という日常にあって、宴会を催すことは、主人がゲストに対して自らがエトルリア人社会のエリートに値する地位に達したということを示す大きな象徴的意味がある。宴会の食材としては、マグロのような魚類、野うさぎや鹿や鳥などの肉類で、特にイノシシが好まれていたようである。ぶどうはアラビア半島がそもそもの原産地だが、紀元前9世紀頃、エトルリア人がぶどう・ぶどう酒をイタリアにもたらしたと考えられている。
- 47 葬儀の最後に親類縁者は死者の魂が出席する豪華な宴会に招かれる慣習があった。
- 48 ラッチェ (1982:13)
- 49 通常は右から左に向かって読む。この書き方は、紀元前3世紀以降、ラテン語およびラテン文字の影響が強くなるまで変わらない。
- 50 紀元前8世紀にギリシア人がフェニキア人とコンタクトをもつようになると、ギリシア人としてのアイデンティティの拠り所であったホメロスの叙事詩など、それまで口承で伝えられてきていたものが、フェニキア人からフェニキア文字を借用することによって作成されたギリシア文字を使って、その内容を定着させることが可能となった。このアルファベットは言葉を書き留めることが可能となったことで瞬く間にエーゲ海に広がった。
- 51 エトルリアの壺と言われるものはギリシアからの輸入品であったかもしれず、ギリシア文字の使用とともにギリシア文化の強い影響を受けていることは確かである。
- 52 今なおエトルリア文字の正体は厳密にはわかっていない（それゆえ「エトルリアの謎」と呼ばれている）。
- 53 このギリシア文字とはギリシアの中でもエウボイア（ギリシアの東方、エーゲ海西部に位置する島のことで、ギリシアではクレタ島に次いで二番目に大きな島である）からイタリアへもたらされたもので、ギリシア文字の中でも西ギリ

- シア型と言われるアルファベットのことである。
- 54 この /f/ を表わす文字は、ラテン語・ヴェネト語には採用されておらず（この音があるにもかかわらず）、オスク語・ウンブリア語の文字列には入っている。これらアルファベットの成立時期の相違に由来するものと考えられる（松本 2001:174）。
- 55 表 a), b) は、<http://www.languagesgulper.com/eng/Etruscan.html> より。
- 56 松本（2001:174-175）
- 57 内容はウェルティナー族とアフナー族との間の所有地をめぐる契約書である。
- 58 矢島（1999:88-89）：「今日知られているエトルリア語の刻文は、数万にも達する。1891年にユーゴスラヴィアのアグラムで、エジプト製ミイラに巻いた布から見出された『アグラム遺文』として知られているものは、一二〇〇語もの単語を含んでおり、ほかにもかなり長文のテキストが見つかっている。ところが、それにもかかわらず、いまもって完全な解読に達していないのだ」。
- 59 ジャン（1990:68）：「壺などに刻まれたエトルリア文字は、ギリシア人の植民地であったカンパーニャ地方の都市クーマエで生まれたアルファベットであろうか、それとも、ギリシア本土のポイオティア地方のアルファベットをモデルにしたものであろうか」。
- 60 エトルリアの都市はその一つ一つが固有の性格・様式・独自性をもっており、エトルリア帝国などというものは一度も存在していない。
- 61 エトルリア文明は洗練された文化を有しており、地中海西部の最古の主要文明の一つである。現在知られている古代エトルリアの情報はローマから判明したものであり、それ以前のエトルリア社会は謎めいたものとして見られるのが通例である。
- 62 ギリシア人は、エトルリア人の支配下にあったイタリアの豊かな鉱物資源（鉄・銅）に惹かれて西方の植民地化を開始した。
- 63 ボンファンテ 1996『エトルリア語』小林標 訳、學藝書林
- 64 なお、小塩（2008:17）：「アルプスを越えて来襲したキンブリー族などゲルマン系の民族との接触があったと推測できる。これら北方のゲルマン人にエトルリア人から直接、文字が伝わった可能性もあり得ることである」という見解も参照のこと。
- 65 ルーン文字は地中海の文字体系であるラテン文字・ギリシア文字・エトルリア文字もしくはそれらの組み合わせに拠っていることは確かだが、ルーン文字が

どの文字に由来しているのか確たる意見の一致はないとされている（ここでは色分けされた3種の線がこれを示している。Anderson (2005:1) : “It is clear that the runic characters were inspired in part by Mediterranean writing systems—Roman, Greek, North Italic, or possibly some combination of these—but there has been no firm consensus on this point.”

- 66 エトルリア語の文書の量（万の単位）はウンブリア語やオスク語あるいはヴェネト語に比べても格段に多い。例えばウンブリア語の文書は数百にすぎない。
- 67 音韻上顕著な点は b, d, g 音に相当する文字をもたないことである。
- 68 エトルリア文字からヴェネト文字が生まれ、さらにそこ（ヴェネト文字）からレティア文字が生まれたという経緯が想定されている。
- 69 ラテン文字と混交しながらかなり長い間、生き延びた文字である。
- 70 エトルリア語とレティア語を同系の言語とみなす考え方（Rix 1998:5 „Hypothese, daß Etruskisch und Rätisch verwandte Sprache sind.“）は、古く伝統的でもあり、また今日的でもある（„ebenso alt wie aktuell“, Rix 1998:7）。形態的な語形についても両言語に共通の祖形をたてることにより説明が可能という： „Die Hypothese eines gemeinsamen Ursprungs der beiden im Rätischen und im Etruskischen gleich lautenden Formen erfordert eine Zusatzhypothese über die Entwicklung der in beiden Sprachen verschiedenen Bedeutung aus einer gemeinsamen Grundbedeutung.“（Rix 1998:44）。あるいは Rix (1998: 60) : „Rätischen und Etruskisch sind aus ein und derselben Grundsprache hervorgegangen.“ も参照のこと。
- 71 エトルリア系の北イタリア文字がキリスト教の時代以前にゲルマン人の一派のマルコマネン人（Markomannen, ボヘミア）によって北方へもたらされ、ルーン文字が誕生する下地ができあがったと考えることもできよう。北イタリア文字がラテン文字から D, R, C, B, F, T, E を借用したとして、ゲルマン語への伝播を紀元前1世紀頃と考えれば、全般的に筋の通った自然な説明となる。同時に、視覚的な形状の類似性が認められるということの他に、文化史上の流れも確認される（『言語学大辞典』別巻「世界文字辞典」S.1137）。
- 72 ルーン文字の書記上の特性と、これら1～5のような諸点が共通しているという（谷口 1971:27-30）。
- 73 「レト・ロマンス語」の一部を形成する「ロマンシュ語」（スイス連邦の新憲法（2000年）の第4条でも「ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語を国語と規定する」と定められている）とは、スイスで話されているレト・



ロマンス系諸方言 (Idiome、通常「方言」と呼ばれるものはロマンシュ語ではこのように idiom と称される) の総称である。行政区でいうとグラウビュンデン (Graubünden = GR) 州に限られ、州内の5つの渓谷ごとに5つの言語態が並存している。GR 州では、一つのコミュニティーに1つの言語という領域性原理は機能していない。つまり、この地方は〈ドイツ語圏〉:ドイツ語のみ、〈ロマンシュ語圏〉:ロマンシュ語・ドイツ語、〈イタリア語圏〉:イタリア語・ドイツ語・ロマンシュ語といった使用状況である。スイス連邦全体では今日、ドイツ語 (490 万人)・フランス語 (150 万人)・イタリア語 (50 万人) およびロマンシュ語 (3万 8 千人) の4つが「国語」となっている。連邦憲法 (第 116 条) でスイス連邦の「公用語」はドイツ語・フランス語・イタリア語であるとされていたが、1996 年の国民投票でロマンシュ語も公用語の地位が認定された (賛成率 76%)。

- 74 1970 年代以降、いわば人工的に統一的な正書法を作り、共通の文語を作り上げようとする動きがある。グラウビュンデン (GR) 州で公用語とされ、学校教育の現場へ導入されようとしているロマンシュ・グリシュン (Rumantsch Grischun) である。ただ、ロマンシュ語の各方言話者は「グリシュン・ロマンシュ語」を受け入れようとはしていないというのが現状である。すなわち、現実的に差し迫った課題として、日常的な言語使用の場面 (例えば、学校・メディア等) で、どの言語・方言を用いるか、おのおの話者個人レベルで決めなければならないという問題がある。実際には、ロマンシュ語の各方言 (Idiome) の話者が5つの方言域の独自性に拘らず、大同団結して進まなければロマンシュ語の行く末は望めないかもしれない (世界の他の地域の少数言語の生き残りを賭けた闘いに鑑み、社会言語学的に見ると、この帰結は自然なものであると言わざるを得ない。言ってみればエスペラント語 (ラテン語あるいは東欧の諸言語を軸に人工的に作られた言語) のような余裕はないのである)。
- 75 イタリアとスイスのレト・ロマンス諸言語の共通性の問題ははまだ議論的となっている (Blättler 2007:7-9)。政治的にも、イタリアとスイスにおけるレト・ロマンス諸言語は本来、別々であったため、まったく違う風に発達してきた。最も話者数が多いレト・ロマンス言語は、北イタリアのフリウリ・ヴェネツィア・ジュリア自治州 (Friuli Venezia Giulia) にて 60 万人以上が話すフリウリ語 (Furlan) である (Blättler 2007:130-40)。さらには、南チロル州におけるドロミテ語があるが (Gross 2004:14)、いずれも明らかにイタリア語とは異

なり、話者のアイデンティティーにとって重要という社会的地位はあるものの、行政的には全く使われず、また学校教育でも微かにしか用いられていない (Blättler 2007:91)。イタリアのレト・ロマンス諸言語は 1999 年の 482 号法律により、守るべき少数言語として国家によって認識されるようになったのだが (Maraschino und Robustelli 2011:76)、それでもいまだに弱い立場にある。ドロミテ語は、政治的に分裂しており (また自分たちの政治的代表がないため) 特に立場が弱い。それでも、ポスト・コロニアルのヨーロッパは少数民族や言語の理解が深まっており、北イタリアのレト・ロマンス語圏の人たちも積極的に自らの文化を育てようとしている (Blättler 2007)。

- 76 ローマ時代以前の言語文化を復元する作業は困難を伴う。
- 77 古代ローマの自然科学者の 1 人として有名なガイウス・プリーニウス・セクンデウスの文献に「山の民族」レティア人について書かれている箇所がある。
- 78 このテーマについては Wanner (2012) を参照のこと。
- 79 印欧語族ではなくセム語族に属するとみなす説もあるくらいである (Deplazes 1987:13)。
- 80 オースティン (2010:246)
- 81 Bonfante (2002:2)
- 82 エトルリア語は右から左に読むので、このエトルリア語の文は MINEMULU-VECEAVILEVIPIIENNAS となり、
- |      |          |       |            |
|------|----------|-------|------------|
| MINE | MULUVECE | AVILE | VIPIIENNAS |
| 私を   | 与えた      | 〈人名〉  |            |

と分節される。

- 83 テュイリエ (1994:50)
- 84 たとえエトルリア人が小アジア起源であったとしてもである。小アジア南西部の諸言語 (リュディア語・リュキア語など) は、少なくとも 20 世紀半ば頃までは、印欧語にも、あるいは、セム語にも属さない独自の語族と見られていた。松本 (2014:417) によれば、エトルリア語は「実は『印欧アナトリア語派』のれっきとした一員であることが判明した現在では、ヘロドトス以来の小アジア移住説を素直に解釈すれば、エトルリア語 = 印欧語という見方も当然出てくるし、実際にまた、この言語をヒッタイト語と引き合わせて全面的に解説するという試みもすでになされている」。

- 85 ボンファンテ (1996:13)
- 86 テュイリエ (1994:53):「エトルリア文明は、エルバ島の鉄に引き寄せられてやって来たギリシアの入植者と地元の間との接触によって、イタリアの地で開花したということである」。
- 87 ブリケル (2009:35-36) による。こうした見方は、1947年のパロッティーノの『エトルリア人の起源』に基づくものである。
- 88 矢島 (1999:90ff.):「未知の言語に対する好奇心はいつの時代にもあり、今日でもエトルリア語の謎に挑む人びとはあとを絶たない」。
- 89 ブリケル (2009:9)
- 90 ボンファンテ (1996:5)
- 91 テュイリエ (1994:46)。確かに、エトルリア語と同系統の言語と想定されている言語に、レムニア語、および、アルプスのラエティア語があり、この3言語をまとめてティルセニア語族と称することもある(エトルリア語とレムニア語の言語圏は確かに非常に離れていて、それゆえ、仮説として、もともと東方で話されていた言語が西に移動してエトルリア語になったとか、逆にイタリアに原郷があってレムニア語の話者が東に移動したという考え方がある)。レムニア語・ラエティア語にはどちらも極めて限られた資料しか存在しないが、知られている限りではエトルリア語に非常に近く、互いに理解できたとも考えられている。レムニア語はエーゲ海北東部のレムノス島で使われていた古代語で、次の墓碑(レムノス)が現存している (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AC%E3%83%A0%E3%83%8B%E3%82%A2%E8%AA%9E>)。

1885年にレムノス島のカムニアで発見された石碑で、紀元前6世紀後期のものとされている。戦士の像と共に記され、98文字、33の単語が記されている (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AC%E3%83%A0%E3%83%8B%E3%82%A2%E8%AA%9E>)。

92 Fiora と Paglia という川を境界に、北エトルリア語・南エトルリア語の区分がある。南エトルリア語はラテン語への吸収が早く進んだ。一方、北エトルリア語は相対的に長く自律性を維持していた。

エトルリア語の研究で知られる人物に、皇

9 3



- 帝クラウディウス（紀元 54 年没）や戯作家ウォルニウスがいる（オースティン 2010:246）。
- 94 古く小アジアからエーゲ世界の諸言語（例：ヒッタイト語・ミノア語）に共通する特徴である。
- 95 文法性について言えば固有名詞（人名）に関しては一定の傾向がある。男性名は通常、子音または -e で終わるのに対し、対応する女性名は -i および -a となる。Larth : Larthi や Aule : Aula などである。なお、3つの名からなる命名法（名家の出であるローマの人物）、例えば、ガイウス（個人を表わす第1名）・ユリウス（個人を表わす第2名）・カエサル（家名）はエトルリア語に由来する（オースティン 2010:246）。
- 96 -em の語尾をとる。
- 97 主格と同形である。
- 98 いわば膠着語的である（オースティン 2010:246）。
- 99 別形として、-s, -(a) がある。
- 100 -i という語形もある。
- 101 ゴート語の -ists に相当するとする説もある（Nesbitt 2002:96）。
- 102 Pfiffig (1984:21) : „Gewisse Ähnlichkeiten mit dem Indoeuropäischen, besonders bei den Pronomina, sind nicht zu leugnen.“ 有史以前の古い時代が印欧語化され、とりわけ代名詞に影響が及んでいる可能性がある。
- 103 人称代名詞が物（この場合は「容器」）を指し示している。
- 104 OVS となることも割と多い。
- 105 印欧語とは異なる様相を呈し、また印欧語以外のどの言語とも結び付かない。
- 106 基礎語彙を見定める作業も困難を伴う。語彙集などから、aisar = 「神々 (deôs)」のように語の意味が判明する場合もある（Rix 1985:212）。
- 107 宗教関係の文書の性質もあり同じフレーズの繰り返しが多く、実際の語数はそれほど多くない。
- 108 松本 (2014:412-413)
- 109 ローマのエトルリア博物館所蔵。この他、約 30 の、エトルリア語と他言語が併用されているバイリンガル史料がある（Rix 1985:212）。例えば墓碑銘に記されているラテン語・エトルリア語のテキストである（こうした場合、大抵はほぼ名前だけである）。
- 110 現在のチェルヴェテリ。外港がピルジ (Pyrgi : ラテン語名ピュルギ) である。

- 111 テファリエ・ウエリアナウ (Thefarie Velianas) のこと。
- 112 この奉納文は、フェニキア語に自由訳されており (例えばロゼッタ・ストーンのように) 逐語訳されているわけではない。
- 113 [http://www.chikyukotobamura.org/muse/wr\\_europa\\_17.html](http://www.chikyukotobamura.org/muse/wr_europa_17.html) (2020年6月アクセス)
- 114 文末の kyšry は「皇帝」の意味。
- 115 ザグレブ博物館所蔵。18世紀
- 116 一般には、テキストの内容はミイラと何の関係もない。ただ仮説として、ミイラは裕福なエトルリア人旅行者であり、テキストはエトルリアの葬儀習慣が記されたものだとする可能性もある。少なくともエトルリアとエジプトの間にかかなりの交流があったことが示されよう。



- 117 神の怒りを避けるという着想は一般的なものである。ヘビのイメージで描かれることがある。
- 118 この他に、CISVM (2輪戦車) PVTE (所有する)「あなたは二輪馬車を所有する」(馬で引く一人乗りの2輪戦車は神の乗り物とみなされていた) など。
- 119 参考にしたのは以下の URL である。
- <https://web.archive.org/web/20070927045655/http://www.iolairweb.co.uk/etrusdict.htm>
- <http://etruscans1.tripod.com/Language/EtruscanBib.html>
- [https://web.archive.org/web/20080310162422/http://www.geocities.com/Athens/Crete/4060/dictionnaire\\_etrusque.htm](https://web.archive.org/web/20080310162422/http://www.geocities.com/Athens/Crete/4060/dictionnaire_etrusque.htm)<https://web.archive.org/web/20080411001457/http://www.geocities.com/Athens/Forum/2803/EtruscanGlossary.htm>
- <https://web.archive.org/web/20071117012819/http://www.verbix.com/documents/etruscan/>
- <https://web.archive.org/web/20070927023503/http://etruskisch.de/pgs/vc.htm>
- 120 主な資料としては、Etruscan-English Dictionary (<https://web.archive.org/web/20070927045655/http://www.iolairweb.co.uk/etrusdict.htm>)、および、Etruscan Glossary (<http://etruscans1.tripod.com/Language/EtruscanBib.html>) がある。補助

資料として挙げられるのは、(1) Damien Erwan Perrotin's Etruscan Etymological Dictionary ([https://web.archive.org/web/20080310162422/http://www.geocities.com/Athens/Crete/4060/dictionnaire\\_etrusque.htm](https://web.archive.org/web/20080310162422/http://www.geocities.com/Athens/Crete/4060/dictionnaire_etrusque.htm)), (2) Patrick C Ryan's Etruscan Glossary (<https://web.archive.org/web/20080411001457/http://www.geocities.com/Athens/Forum/2803/EtruscanGlossary.htm>), (3) Paolo Agostino's Etruscan Glossary (<https://web.archive.org/web/20071117012819/http://www.verbix.com/documents/etruscan/>), (4) Dieter H. Steinbauer's Etruscan Vocabulary (<https://web.archive.org/web/20070927023503/http://etruskisch.de/pgs/vc.htm>) である。

## 参考文献

- Ameka, Felix, Alan Dench & Nicholas Evans (eds.) *Catching language: the standing challenge of grammar-writing*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Anderson, Carl Edlund (2005) : “The Runic System as a Reinterpretation of Classical Influences and as an Expression of Scandinavian Cultural Affiliation.” [http://www.carlaz.com/phd/AndersonCE\\_1999\\_Runes\\_and\\_Reinterpretation.pdf](http://www.carlaz.com/phd/AndersonCE_1999_Runes_and_Reinterpretation.pdf)
- 朝日新聞東京本社文化企画局編 (1996) 『エトルリア文明展 : 最新の発掘と研究による全体像』朝日新聞社
- オースティン・ピーター / 澤田治美 監修 (2010) 『世界言語百科』 柘風舎
- Blättler, Jana (2007) : *Kleinsprachen und Sprachstandardisierung*. Champfer : Eigenverlag.
- Bonfante, Larissa (1990) : *Etruscan*. London : British Museum Publications Ltd. ボンファンテ、ラリッサ著、小林 標 訳、矢島文夫 監修 (1996) 『エトルリア語』 (大英博物館双書 失われた古代文字を読む6) 学芸書林
- Bonfante, Giuliano & Larissa (2002) : *The Etruscan Language: An Introduction*. Manchester : Manchester University Press.
- ブリケル, D. / 平田 隆一 監修 / 斎藤 かぐみ 訳 (2009) 『エトルリア人——ローマの先住民 起源・文明・言語』クセジュ文庫
- Deplazes, Gion (1987) : *Funtaunas. Istorgia da la litteratura rumantscha per scola e pievel*. Tom 1: *Dals origins a la refurma*. Cuir/Chur : Lia Rumantscha.
- Evans, Nicholas (2010) : *Dying Words. Endangered Languages and What they have to tell us*. Wiley-Blackwell. エヴァンズ、ニコラス著、大西・長田・森 訳 (2013) 『危機言語 言語の消滅でわれわれは何を失うのか』 京都大学学術出版会
- Corsen, Wilhelm (1875) : *Über die Sprache der Etrusker*. Leipzig : Druck und Verlag von B. G. Teubner.
- Gabelentz, Georg von der. 1891. *Die Sprachwissenschaft. Ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse*. Leipzig : Weigel Nachf.
- ギボン (中野好夫他訳) (1995-96) 『ローマ帝国衰亡史』1 ~ 11. 筑摩書房
- Gross, Manfred (2004) : *Romanisch. Facts & Figures*. Cuir/Chur : Lia Rumantscha.
- 長谷川博隆 (1994) 『カエサル』講談社学術文庫
- ドーラ・ジェーン・ハンプリング著 (平田隆一訳) (1977) 『エトルリアの興亡』タイムライフブックス
- 長谷川博隆 (1991) 『カルタゴ人の世界』筑摩書房

- 秀村欣二・三浦一郎（1974）『世界の歴史2：古代ヨーロッパ』社会思想社現代教養文庫
- 平田隆一（1982）『エトルスキ国制の研究』南窓社
- ジャン, G./ 矢島 文夫 監修 / 高橋 啓 訳（1990）『文字の歴史』創元社
- ヴェルナー・ケラー（阪本明美訳）（1996）『エトルリア——ローマ帝国に栄光を奪われた民族』祐学社
- 松谷健二（1991）『カルタゴ興亡史：ある国家の一生』白水社
- 松本克己（2001）「エトルリア文字」亀井 他（編）『言語学大辞典』別巻「世界文字辞典」三省堂
- Jones, Ilse Nesbitt (2002): *Five Texts in Etruscan: early Gothic language of Tyrrhenians and ancient Jutes*. New York: Peter Lang.
- 『世界文字辞典』（言語学大辞典 別巻）三省堂
- Maraschino, Nicoletta & Robustelli, Cecilia (2011): “Minoranze linguistiche: la situazione in Italia.” In: G. Stickel (Hg.): *National, Regional and Minority Languages in Europe*. Frankfurt: Peter Lang. p.73-80.
- 松本克己（2014）『歴史言語学の方法 ギリシア語史とその周辺』三省堂
- 南川高志（1998）『ローマ五賢帝——「輝ける世紀」の虚像と実像——』講談社現代新書
- 宮岡伯人・崎山 理（2002）『消滅の危機に瀕した世界の言語』明石書店
- 村川堅太郎編（1974）『世界の歴史2：ギリシアとローマ』中公文庫
- 西田龍雄（2002）『アジア古代文字の解説』中公文庫
- 小野林太郎（2017）『海の人類史 東南アジア・オセアニア海域の考古学』雄山閣
- パロッティエーノ M. [ほか] 著（1985）（青柳正規・大槻泉・新喜久子 訳）『エトルリアの壁画』岩波書店
- ラッチェ、アネッテ (Annette Rathje) 著（1982）（大森寿美子 訳）『エトルリア文明 700 年の歴史と文化』（*Gli Etruschi 700 anni di storia e cultura*）
- Pfiffig, Ambros Josef（1969）：*Die Etruskische Sprache: Versuch einer Gesamtdarstellung*. Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt.
- Pfiffig, Ambros Josef（1984）：*Einführung in die Etruskologie*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- ロレンス D.H. 著、奥井潔訳（1987）『エトルリアの故地』南雲堂
- Rix, Helmut（1985）：“Schrift und Sprache,” In: (ed. M. Cristofani) *Die Etrusker*. Stuttgart & Zürich: Belser.
- Rix, Helmut 1998 □ *Rätisch und Etruskisch*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Uni-



versität Innsbruck.

- 柴田紀男 (2003) 「東部ポリネシアの場合」 崎山理 編 『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』 (国立民族学博物館調査報告 39:17-30)
- ジャン=ポール・テュイリエ 青柳正規監修・松田勉子訳 (1994) 『エトルリア文明——代イタリアの支配者たち——』 創元社 (知の再発見双書)
- 塚原富衛 (1996) 『ローマ・カルタゴ百年戦争』 展転社
- 矢島文夫 (1999) 『解説 古代文字』 ちくま学芸文庫
- 弓削達 (1973) 『地中海世界——ギリシアとローマ——』 講談社現代新書
- 弓削達 (1989) 『ローマ帝国とキリスト教』 河出書房新社
- Wanner, Gerhard (2012) : „Räter und Rätoromanen in der Geschichtsschreibung Voralbergs,“ In: Wanner Gerhard & Jäger Georg (Hg.) : *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur : Desertina, p.69-100.
- Woudhuizen, Fred C. (1991) : “Etruscan & Luwian.” *Journal of Indo-European Studies* 19 (1/2), p.133-150.